一夏が主人公？いいえ、ヒロインです

御根通久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一夏が主人公？いいえ、ヒロインです

【Ｎコード】
Ｎ８３３８Ｙ

【作者名】
御根通久

【あらすじ】
篠ノ之箒は半改造人間である、幼少の頃束の才能を妬んだ者により、瀕死の重傷を負わされた。そんな時一人の謎の男が束に二つの石を差し出し、その石を用いて箒は死ぬことはなかった。そして、箒の特異性をごまかすためだけに束はＩＳを開発し、その能力を見せつけ、妹の特異をごまかすことに成功させた――――これは、理不尽な現象を引き起こすようになった箒の一夏にとってのヒーローとなる物語である

第一話（前書き）

いい加減風呂敷を広げようとしないでとっとと他の小説を書き上げたほうがいいと分かっているんですけど、書き上がってしまったので投稿します……箒さんの性格、改変しており主人公です……ついでに改変要素多いけど、一巻相当分終わった頃にまとめを出します、それではどうぞ！

第一話

「えー……えっと……織班一夏です……よろしくお願いします」

私を除く女子の視線が、自己紹介したかつての幼馴染の少年である織班一夏に

集中していた。それだけの紹介で座ろうと思っていたらしいのだが、女子たちの

視線はそれを許すことはなかったらしい、見事に続きを期待する視線にさらされて

困惑しながら私に視線を送ってきていた……なぜか真後ろの席に

配置されているのだが、これは学園側が少しでも心を軽くするように古いとはいえ

知り合いを近くに置いておこうとする処置なのだろうか？

それはともかくとして、当然ながら自己紹介を助けることなど出来る訳がないので、

目線だけで自分でどうにかしろと突き放した……それだけで理解したのか一夏は

見た目では判断不可だが落ち込みつつも、軽く目をつむりどうにか続きを考えていた。

そして誰も気がつかないことではあるのだが、一人の女性――織班千冬さんが

いつのまにか教室内に入っていた……誰か気がついてもいいはずなのに、と思っていると。

「以上です」

大半の女子がズッコケ、頭を思いっきり机に叩きつけてしまった者もいる。

見事なリアクションだと思いながら、これから訪れるであろう一夏の不幸？を感じ取り、

一夏に覚悟だけはしておけという視線だけを送っていた。

その視線を受け止めた一夏は不思議そうにしていたが――直後に教室中に響きわたった

音の元である打撃を受けて意味を理解したようだった。

そして、おそるおそる視線を背後に送る一夏にまた叩かれるんだろうな、という未来を

予知できた。

「げぇ！関羽！！？」

「誰が三国志の英雄かバカ者」

また教室にスパーンという聞いていて清々しいほどの音を発生させる打撃が一夏の頭に

叩き込まれてしまった……目の前でうずくまる幼馴染の姿に痛そうだなという哀れみの

視線を送っていると教えてくれよと視線で睨まれた。

確かに脳細胞はかなり死んでしまっただろうが、それでも死に至ることはないのだし、

女子たちの期待を裏切ったのだから甘んじて受け入れてろ、と視線で返して一夏は渋々と

視線を叩いてきたぬしへと向けたが、今度は驚愕していた。

一夏にはあまり見せない優しい表情を向けていたからである……かくいう私も昔ですら

見ることがなかった表情に少々唖然としていたが。

「諸君、私が織班千冬だ。君たち新人を一年間で使い物となる操縦者に仕立て上げるのが

私の仕事だ。私の言うことを聞き理解しろ、理解しない場合には理解できるまで

教えこんでやる。逆らっても構わないが、私の言うことだけは聞け、いいな」

ものすごい暴力宣言である、しばらく見ないうちに変わってしまったのだろうか、と

軽く悩ませていると、一夏の方からボソリと「間違いなく千冬姉だ」と聞こえてきた。

———実は昔の頃からああいう性格だったのか、と若干遠い目をしておいた。

が、その思考はわりとすぐに破壊しつくされる事となる……ある程度知っていたことでは

あるのだが、少々嘗めていたようである。

≪キャアアアア！！本物の千冬さまよ！！！≫

ニセモノなんか居たのか、それは初耳だ———それ以前にうるさくてかなわないので

もう少しだけ声量を絞って欲しい……無駄に耳が良いせいで常人よ

りは煩く聞こえてしまうので
耳をふさいでも鼓膜が破壊されるかと思うのだから。

≪ずっと、ファンでした！！もちろんこれからも！！≫

≪私、お姉さまに憧れて日本語を覚えてブラジルから来ました！！≫

ものすごく流暢な日本語だな……姿を見なければ十分に日本人として名乗っていけるぞ。

だからもう少しだけ声量を（ｒｙ

≪私！お姉さまのためでしたら命を捨てれます！！≫

ちらりと視線を送って見たのだが目が真剣そのものだった……正直怖い、私が対象でなくて

よかったと安堵するが相変わらずうるさいので声量（ｒｙ

「……毎年毎年、よくもこれだけのバカ者を集めることができるものだ。私のクラスだけ

集まるように手配しているのか、鬱陶しい」

その発言に教室中が一瞬だけ静まり返った。

その様子に私は安堵し、千冬さんの人気は下がっただろうが正直助かったと思ったのも

つかの間――――一旦安堵したためその後の反応に若干遅れてしまった。

≪きゃああ、もっと罵って！！！！≫

≪でも、時には優しくしてーー！！≫

≪でも調子に乗らないように躾をしてーーー！！！≫

姉さん、助けてくださいこの教室は変態だらけだ――――と考えたところでそういえばあの人も

割と変態の部類だったと思い出しては軽く絶望していた。

私を助けるためのカモフラージュのために大々的に今の状況を作り上げて専用ＩＳ（笑）を

送り込んできて感謝はしているのだが、私が２０までに誰かと結ば

れないときに嫁にもらう
発言をするほどの変態だった――今思い出してもなんで姉さんが旦那なんだという
疑問がわくが、今は割と関係がないな。

「で、自己紹介も満足にできないのか」

「――いやだってち――――――織班先生」

なんとなく嫌な予感がしたので一夏の机の上に千冬×織班先生〇と書いた紙を素早く
置いて、それに気がついた一夏が慌てて訂正し出した――また叩かれるところを
なんとか救出して一仕事を終えた私は軽くかいてもいないが額の汗を拭き取る仕草をする。
出席簿を構えていたから一夏が（昔と変わってなければ）いつものような感覚で呼んで
しまえば確実に降りおろされていい音が響きわたっていたことだろう。
一夏の脳細胞はほんの少しだけだろうが確実に守られることとなっ

た。

≪あれ？そういえば織班って姓――――もしかして親戚？≫

≪でもそれにしては親しいわ――――もしかして姉弟じゃないかしら≫

想像力のたくましい女子生徒の前には私の努力など無意味であったようだ。

――――いや、分かってはいたのだ、千冬さんが他のものとは明らかに違う扱いを

解釈の仕方を変えれば親しいように感じ取れるであろうと……言っても否定するだろうが、

手がかかるときに千冬さん自身が諌めようとすると確実に笑みを浮かべているのだ。

親しいものに対してのみ見せるのだと周りに指し示すかのように、気がつかないのは本人と

それを受ける一夏だけである。

≪もしかして――――三人のうちの一人なのもそれが関係してるのかしら≫

ここでようやく補足するが、ここはＩＳ学園――正式名称である「インフィニット
・ストラトス」の略称であるＩ・Ｓという名の宇宙で活動することを想定して作られた
マルチスーツフォームであるものを扱う為の養成を目的とした学園である。
一般的に原理は解明できてはいないのだが、このＩＳは女性でしか扱えないという男にとっては
欠点でしかない特徴があり、女尊男卑の世の中になった原因――――それの大元の原因である
私には後ろめたいことだが、この点についてはまた機会があれば説明が入るだろう――である。
が、最近となり三人ほどそのルールを無視してＩＳを起動させた男たちがおり、その特異性から
三人ともこの学園へと強制転入することとなった。
このことが知られたまま外で過ごしてしまえば間違いなくマッドな方々や男尊復権の方々が
大喜びで解剖して調べようとするだろう。

好奇心は猫をも殺すというが、この女子にだけさらされる環境に来たことでその事を深く
実感しているに違いない――とはいえ一夏達は悪くはない、普通女性しか動かせないものを
男が動かせると思えないけど見かけた記念に触ってみようかなと思う人間など世界中に
数多くいるのだから。

≪いいなー。変わって欲しいなー≫

≪羨ましい――≫

その言葉が一夏に深く突き刺さっていたのだが、なぜか私の方を一瞬だけ見て、続いて
千冬さんの顔を見てから思いっきり首を振っていた。
このシスコンめ、そのポジションだけは誰にも譲らない気なのか――
――あれ？私の顔を
見たのは一体なぜだ？――――あぁ、そうか私だけが一夏に好奇心の目を向けてないから
精神的な癒しを求めていただけなのだろう。

おっと、自己紹介がいつの間にか再開していた、危うく自分の出番で慌てるところだった。

「篠ノ之箒だ、特技・趣味は剣道。これから一年よろしく頼む」

そのあとも淡々と自己紹介が進む。まあ、特に意識するようなものじゃないし――とはいえ

大半が一夏に対するアピールのものが多いな、一夏のやつが困っているが助け舟など出せない。

せめてもの情けとしてお前の真後ろ以降の視線は私がなんとか遮断してやるから勘弁してくれ。

「イギリス代表候補生のセシリア・オルコットですわ趣味は――」

一夏はとっぷして聞いていなかったが、私はしっかりと聞いていた――代表候補生か、

かなり優秀なのだろうな――とはいえ一夏に対して見下すような視線を送っていることだけは

いただけないことである、気がついていないからいいものの、男子でＩＳ使いなのだから

女尊男卑はあまり意味をなさないのは分かっているのだろうか？
まあ、それ以前に代表候補生としての品位に泥を塗っているような気がするが、今のところは
あまり害はないだろうと自分に言い聞かせて軽く無視しておく――
――そうしてすべての生徒が
自己紹介を終えたところで時計の方を見ると結構いい時間だった。
「さて、ＳＨＲも終わりだ。諸君らにはこれから半月でＩＳの基礎を覚えてもらう。
そのあとに実習に入るのだが、基本動作は半月で覚え込ませろ。いいかよかろうが、
悪かろうが返事をしろ。私の言葉には確実に返答しておけ」
なんという鬼教官なのだろうか――――まるで悪魔だと思ったが、悪魔はまだ人間じゃないから
いいほうであり、千冬さんは人間の限界を知っている分タチが悪いであろう――――目の前で
一夏がそうつぶやいていたからきっとそうなのだろう。
――――それならば私の扱いはどうなるのか甚だ疑問である、人間と

みなして教えるのか、
人間以外として教えるのか――――言い忘れたが私はとある理由で姉が私の命を救うために
怪しい人間から受け取った謎の二つの石を心臓に移植して改造された半改造人間である。
心臓と身体能力以外では人間だと言いはれ――――変身できるからその部分も人外か、一応
ＩＳの一種であると姉がごまかしているのだが――――真実を知って人間扱いを
してくれそうなのが一夏と千冬さんと姉と両親だけだろう。

「そろそろ座れバカ者」

――――一夏、まだ立ちっぱなしだったのか、気がつかなくてすまない。
そしてさようなら数多くの脳細胞たちよ。

第一話（後書き）

不定期更新ー……他のをいそいで書かなきゃいけないとわかっているのに浮気してしまうｏｒｚ

第二話（前書き）

セシリアさんのキャラちょっと……崩壊ってわけではないけど

そこそこ崩壊

そして箒は鈍感属性追加……束さんの立ち位置をやらかしたけど

割と後悔していない。

第二話

授業は終わった……まあ、基礎理論のようなものだからわからない方が

おかしいんだがな。

入学前に読んだ参考書そのままだし、復習みたいなものだから入学してるやつには

この程度出来ない方がおかしいのだ。

「つ……疲れた……」

――訂正しよう、目の前の幼馴染には無理なようであった……まあ、弁明するしたら、

女子は中学の頃からコツコツと基礎の基礎から学んでいたのだが、男子は

技術者にでもならない限り習うようなものではないのだから一夏には理解

できないとしてもなんらおかしくはない。

「無事か？」

「あ、あー……なんとかな」

こっちから声をかけると一夏が疲れた様子を強引に直すかのように急に元気を

取り戻して話しかけてくる……一体どうしたんだ？

ところで、私が話しかけた瞬間に遠巻きに見ていた女子達が抜け駆けずるいとか

そういう事を小声でつぶやき始めたのだが、自分から話しかければいいだけの話だ。

何事も自分から進んで行動を起こさなければいけないからな。

とはいえこの程度の視線でひるむなんてしない……千冬さんの視線に比べれば

微弱すぎる。

「すまん、わからない個所をそれとなく教えてくれ」

「わかったから、半土下座状態はやめろ」

周りの視線が女王様？に変わり始めている上にいいなあという言葉もポツポツ

こぼれ始めているんだから……教えるにあたってどういったテストを行えば

いいのかちょっと考えようとすると———誰かが近くによってきた、確かセシリア・オルコットだったか？

「ちょっとよr「織斑一夏ーーーー！！！！ぐへ！！？」……く……て」

オルコットが話しかけようとしたタイミングで、おそらく隣のクラスであろう男子が

駆け込んできたうえに一夏に飛びつ———きそうになったところで救出しておいた。

男子生徒はというと飛びつこうとした姿勢のまま窓際近くの床に激突した……

もう少し程だけ、高く飛ぼうとしたら確実に窓にぶつかって割れて落っこちていただろう。

流石にそういう状況であれば助けていただろうが、落ちない事が

分かっていたので一夏を衝撃から助けることにのみ集中しておいたのである。

「……いや、箒……あいつ大丈夫なのか？」

「問題ないだろ、微妙に受け身をとっていたみたいだからな」

綺麗な前受け身だったからな、今はおそらく床と激突した事による視線の

一斉集中の影響で恥じ入って動けないだけだろう……あと数秒すれば確実に復活できるはずだ。

そういえばオルコットはとりあえずスルーしておく。

もしかしたら一夏にこの学園での同性の友人が出来そうなチャンスの方が遥かに大事だ

———ついでに言えば話しかけようともしてなかったのでその事が一番大きな

スルーするための理由だったのだが。

「何故避けた」

「いや、避けたというよりは――――」

「あの速度で衝突すれば二人とも危なかったから片方を優先的に助けただけだ」

私が声をかけたことで存在に気が付いたのか、机の位置を確認するように

目線を動かして首をかしげていた――――どこもおかしいところは無い筈だが

何かおかしいのだろうか。

思わず机を確認しつつあたりの机と見比べてみるがどこにもおかしい違いなどない。

が、急に床に打ち付け始めるという奇行を行った男子にその疑問は吹き飛んだ……

男子はもう一人いるのだからそっちの方を友人にした方がいいだろうと考え始めたが、

そっちの男子は来る気配すらないので、やはり譲歩するべきだろうか？

「お、おい……（色々な意味で）頭大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない……じゃなくて！！織斑一夏！！」

一夏が心配して若干遠い位置から声をかけると、痣が付いたでこを見せつけつつ、

男子がびしりと指を差した……人に指差してはダメだと学校の先生に習わなかったのか？

確かに人差し指だといわれているのだが指し示してはダメだ。

「友達になってください、女子の視線が怖いです。男子の話し相手プリーズ」

若干涙声で土下座していた……精神面が弱すぎやしないか？

が、一夏はその気持ちを理解していたのかその精神面の弱さには触れることなく、

先ほどの奇行を頭から取り去ったようで何故か熱い握手を交わしていた。

誰か、この状況を説明できる奴はいないのか？と周囲に助けを求めるかのように

視線を移していたのだが、全員一夏と男子に視線を集中させていて、その内の
一部の生徒が赤い顔して荒い息を吐いていた――――即刻視界から外したが。

「俺の名前は織斑一夏だ……まあ、知ってたみたいだが」

「いや、ニュースで顔写真とか普通に出てたぞ？俺のも流れてたし、俺は真鯛鮪だ」

真鯛鮪よ、すまない……一夏の事以外おもいっきりスルーしてしまっていた。

だって新聞の方にも一夏の事が大きく表示されていたし姉さんも「いっくんと
他二人がね、ＩＳを動かせたんだよー」としか言っていなかったから
名前を見る余裕がなかったんだ。

と、ここでオルコットが、気を取り直して口を開き始める気配が伝わってきた。

「ちょっとよろしく――――

「箒ちゃーーーん！！妹成分足りなくなったから補給に来たよー！」

……」

また妨害されていた……が、今度は私に危害が加わりそうな様子だったので

飛びついてきた女性の頭を押さえつけそのままのスピードでちょうど開かれていた窓へと投げ捨てて、一仕事終えたかのように手を軽くたたいておいた。

妹成分とはなんだ妹成分とは……今朝、少し寝ぼけていた私に十数分抱き着いて補給完了とか言っていたじゃないか姉さん。

クラス中が一気に静まり返り、ここ二階だけど結構高かったよね？という声とに、

数人の女生徒が窓の外を覗き込む……まあ、悲鳴など起こるような事態にはなり得ないのだが。

「酷いよ箒ちゃん！ただ堪能しようと思っただけなのに！ねえ、いっくん！！」

「え？……いや、え？」

いつの間にか一夏の横に現れた様子に窓に居た女子生徒が交互に外と姉さんを見比べていた。気にしない方がいい、姉さんは異常なのだから

瞬間移動の装置でも作り上げたに決まっている……いちいち驚いていたら

常に接し続けることなど出来るはずがないのだ。

というより一夏も久々だったから姉さんの破天荒ぶりを忘れているのだろうか？

まあ、そのうちいやでも思い出すようになるだろうが……ところでまた鮪が

頭を抱えた後、床に思いっきり頭を打ち付けているんだが何かの癖なのか？

≪あれ？姓が一緒って事は姉妹だったの！！？≫

≪でも……篠ノ之さんの方が大人っぽいよね？≫

「あ、東さんか」

「思い出すのが遅いよいっくん！！」

「それは仕方が無いだろ姉さん。姉さんよりは長く接していた私ですら――――いや、

面影があまり残らないだろうからノーカウントだな」

登校して一回視線を合わせたにも関わらず一夏は私に気が付くのを遅れており

首をかしげて見覚えがあるな、程度だった上に私が話しかけてようやく

気が付くほどの阿呆なのだから。

と言おうと思ったが結構な時間がたっているし、遊んだ回数が多かったとはいえ、

友人程度にそこまで執着が無いだろう。

「何故かちょっと憂鬱になるような事を思われてるような気がする」

「どうしたんだ一夏」

疑問に思いつつ首をかしげながら一夏を見るが、なんでもないと返されたので私は深く

追求しようとは思わなかった、が……鮪は一夏の態度に何かを感じ取ったらしく、

私と一夏の顔を交互に見てからホホウと言いそうな顔で頷いていた。

———余談だが私の姉さんは研究室に戻るという書置きの紙と同時に姿を消していた。

「よ……よろ「そうだ箒、中学剣道全国大会で優勝おめでとう」

……」

気のせいなのだろうか？オルコットが泣きそうな表情になっているのだが……

もしや、話しかけたいのだろうか？だとしたら悪かったな……きっかけをなんとか

作ってやるから少しだけ我慢してくれ。

「なんで知っているんだ？」

「いや……箒の情報を知るには一番手っ取り早いかなって新聞で」

なんで私の情報を知ろうと思ったんだと思ったが、まあ六年前になんの前触れも――

あったが――――無く姿を消したそこそこ仲が良かった一家の消息を知りたいという事

なのだろうと納得しておいた。

さて、一夏も特に話の続きが無いようであるし、そろそろオルコットに発言の機会を

与えてやるとしよう。

「あーあと昔よりき――――「そういえばオルコット何か話があるそうだが？」」

「あの……篠ノ之さん？会話を遮られるのって悲しいですのよ」

しまった……何かを言いたかったが、言葉を探していただけだったのか。

一夏を見やると、もういいと項垂れていた……仕方がない、昼休み辺にでも

しっかりと話を進めていくこととしよう。

「……私も特に話すことが無くなりましたわ」

そう言ってオルコットも落ち込んだまま席へと戻っていった。

……私が悪いのか？と周りに視線を送ってみるのだが、全員最後だけは悪い！と

目線で送ってきていた……まあ、最初の方は私のせいじゃないからなぁ。

予鈴が聞こえてきたので真鯛はどこかすっきりとした表情で教室を出ていっていた。

学園の友人ができたのがそんなに嬉しかったのだろうか？

山田先生が落ち込んでいる一夏とオルコットを見て不思議そうに首をかしげたのと、

千冬さんがヤレヤレとため息をついていたのが印象的だった。

第二話（後書き）

ちなみに基本的に箒視点で話が進むので、その他のキャラの心情は裏本編で公開する予定……ライダー要素出てないけど代表決定戦あたりで出てくる予定

第二話裏（前書き）

とりあえず前回の転生者Ａとセシリアの一部の心境

あの時、こんなことを考えてましたー

そしてヒロインである一夏の心境はみなさまのご想像にお任せします

第二話裏

ｓｉｄｅ：鮪

授業が終わった瞬間に俺はものすごい勢いで隣のクラスへと駆け込んだ。

「ちょっとよｒ「織斑一夏ーーーー！！！！！ぐへ！！？」……く……て」

誰かが一夏に話しかけていたが、知ったことではない。

というかＳＡＮ値がガリガリと削られているのだから修復するために目的の人物へと

飛びつく、ハーレム野郎とか思っててごめんなさい！

女子ばかりの視線にさらされるってものすごく辛いって自分がその境遇にたって

理解できたよ！！！別クラスにも居るらしいが、安全そうな一夏一択で

飛びついたが、いつの間にか目の前には一夏ではなく床があった。

当然前受身はとったものの恥ずかしい限りだ……若干恨みながら視

線を
密かに送ったところ、そこには一夏を自分の横に持ってきてる箒がいた……

「……いや、箒……あいつ大丈夫なのか？」

「問題ないだろ、微妙に受け身をとっていたみたいだからな」

綺麗な前受け身だったからな……おかげで手のひらが痛いけど怪我はないですよ。

そういえばオルコットはとりあえずスルーしておく……唖然としてるけどもしかして

あのイベントを潰してしまったのだろうか？

「何故避けた」

「いや、避けたというよりは――――」

「あの速度で衝突すれば二人とも危なかったから片方を優先的に助けただけだ」

箒が答えを言っていたので……と、ここで机の位置が原作と違うことに気がついた。

あっれー？もう少し離れた位置に座ってなかったっけー？

しかも原作より仲が――――ハ！！？ダメだダメだ俺がいる地点で原作云々は

無くなってるんだからこれから友人になろうとしているのに失礼じゃないか！！！

煩悩抹殺煩悩抹殺煩悩抹殺煩悩抹殺煩悩抹殺煩悩抹殺煩悩抹殺煩悩抹殺！！！

しばらく床に打ち付けて冷静になる……スマン脳細胞たちよ。

「お、おい……（色々な意味で）頭大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない……じゃなくて！！織斑一夏！！」

一夏の優しさが身にしみてきた……こんな奇行を行なった奴に優しく声をかけるとは、

なんていい奴なんだ！と思ったが、それよりもここに来た理由を述べなければ

ならないのだった！！！

「友達になってください、女子の視線が怖いです。男子の話し相手プリーズ」

若干涙声で土下座していた……精神面が弱すぎやしないか？とか言わないで欲しい。

誰にも話しかけられずにジーーーーッと覗き込まれるだけって辛いんだぞ！！

好意的と言えば好意的だけど珍獣を見るような眼なんだぞ！！？

「俺の名前は織斑一夏だ……まあ、知ってたみたいだが」

「いや、ニュースで顔写真とか普通に出てたぞ？俺のも流れてたし、俺は真鯛鮪だ」

と、俺の言葉を聞いた一夏が若干落ち込んでいた……まあ、どうでもいい余談だが、

俺やもう一人よりも一夏の方がＰｉｃｋｕｐされてただけだし、情報がないのは仕方が

無いんだけどな！

と、ここで金髪娘が口を開く気配が――――あのイベントが――――って何考えてるんだ！

「ちょっとよろしく――――

「箒ちゃーーーん！！妹成分足りなくなったから補給に来たよー！」

……」

ありのまま起こったことを話すぜ！明らかにおかしい立ち位置の人物が箒に突撃を

かましたと思ったらいつの間にか窓の外に投げ捨てられていた！なんて容赦のなさ！

――――姉妹仲が悪いのは前情報通りなのかなー？

でもそこそこに仲は良さそうな気もするし……わからん。

「酷いよ箒ちゃん！ただ堪能しようと思っただけなのに！ねえ、いっくん！！」

「え？……いや、え？」

ありのまま（ｒｙ、今度は確実に時間停止系統だよね！！？いつのまに一夏の横に
いるんだよ！篠ノ之束！！

≪あれ？姓が一緒って事は姉妹だったの！！？≫

≪でも……篠ノ之さんの方が大人っぽいよね？≫

「あ、束さんか」

「思い出すのが遅いよいっくん！！」

「それは仕方が無いだろ姉さん。姉さんよりは長く接していた私ですら――――いや、
面影があまり残らないだろうからノーカウントだな」

おや？箒の言葉を聞いた途端に一夏が若干落ち込み気味になってるぞ？

ん？これはひょっとして――――

「何故かちょっと憂鬱になるような事を思われてるような気がする」

「どうしたんだ一夏」

とりあえずいつの間にか消えた束さんはスルーしておくとして……逆だよ！

鈍感と好意の関係が逆になってるよ！！が、微笑ましいので応援しようと

密かに心の中で誓いこんだ……記憶喪失の薬（一部のみ）欲しいと思った今日

この頃、このままじゃ作り物を眺めてる最悪な奴になってしまう。

……鮪ｅｎｄ

……セシリア

世界で三人しか居ないＩＳを起動できる男子……その一人に話しか

けようとして、
二度も邪魔が入りました……一人目、同じ男子……まあ、この学園では男子の数が
少ないのですし……邪魔してはいけませんわよね……で、キリが良さそうになったので
話しかけようとしたら今度は篠ノ之博士が来訪してまいりました。
篠ノ之さんと目の前の男子の片割れと織斑先生以外には興味を示さないと公式に
発表なさっておいででしたので口をはさむのはやめておきましたわ。
これでイギリスにコアを渡さないと言われたら大変ですもの……で、またキリが
良くなりましたが――こ、今度は邪魔されませんわよね！！？細心の注意を払い、
意を決して――――――！！！

「よ……よろ「そうだ箒、中学剣道全国大会で優勝おめでとう」
……」

――――――――――怒る気力も失せましたわ……

で、何らかの話が進んでおりましたが、どうせ邪魔が入るのでしょうし、

と諦めておりますと……

「あーあと昔よりき――――「そういえばオルコット何か話があるそうだが？」」

「あの……篠ノ之さん？会話を遮られるのって悲しいですのよ」

織斑一夏さん……たった一回でしょうけど三度も遮られた私には今の心境が

理解できますわ……もう時間も時間ですし今回はおとなしくしておきましょう。

「……私も特に話すことが無くなりましたわ」

……セシリアｅｎｄ

第二話裏（後書き）

不定期なので、次回投下はまだまだ未定です。

第三話（前書き）

セシリアをまともにするためのＭＯＢ出現。

セシリアが少し高圧的な態度だったのは舐められないように

していた為です。

第三話

結局、昼食は一夏と摂る事は出来なかった……姉さんが来襲してきたからだ。

曰く妹成分が尽きたらしい……だめだこの姉何とかしないと……そうして半ば

いい加減に姉さんの話を聞きつつ昼食を終えて教室に戻り休み時間のたびに一夏が

分からないだろう箇所をメモした場所を確認しつつ一日が過ぎて放課後になった。

「さて、クラス代表を決めておこう。決まらなければ帰れないから覚悟しておけ。

まあ、自薦他薦どちらでもいいのだが」

「セシリア・オルコットがいいと思います」

他薦でもいいと聞いた瞬間に手を挙げてオルコットを推薦しておいた。

珍しさから一夏に推薦しようとする奴の方が多いだろうから、早く

帰りたいだろう

放課後という時間帯を武器に速攻であまり文句の出ない代表候補生である人物を推す。

ちらりと本人に視線を送ってみたが、即座に推薦した事に驚いているようだった

……が、途中で気を取り直したのか当然であるという態度を取り始める……まあ、

代表候補生なのだからＩＳ操作にも自信があるだろうしクラス対抗戦でも一年では

二人しかいないという話だから経験者を推すのは当然だろう……姉さんの情報では

代表候補生の中でもかなりの腕前だと評価していたし人選ミスではないはず。

物珍しさで選ぶのは愚の骨頂に過ぎない……そう考えていた時期が私にもあった。

≪えー織斑君がいいと思うんだけど≫

≪でも篠ノ之さんもいいんじゃない？ほら、製作者の妹だし≫

拙い流れが見えてきた気がする……頼むから推薦をするのだけはやめてくれよ。

……代表候補生には同じ量だけ訓練を積んだ人間をぶつけるのが正道なんだから。

というか製作者の妹だからっていう理由だけで推薦されても———

非常に困る……私などよりもオルコットを代表にしたほうがいいに決まっている。

≪先生！織斑君を推薦します！！≫

≪じゃあ私は篠ノ之さんを推薦します！≫

一夏と目があった……他に織斑って居たっけ？という表情をしている。

かくいう私も私でない篠ノ之さんは誰だろうな、と周囲を見渡してみるのだが、

残念ながら自己紹介の時に”お”で始まる生徒は一夏（オルコットら留学生は漢字

終了後のアルファベット順）だけで、”し”で始まる生徒は私だけだった。

「「辞退――――」」

「他薦されたものに拒否権はない」

にべもなく却下された……なんでだ、こういうのはやはり実力のある者に任せた方が

安全だろう、確かに二組・三組も代表候補生は居ないのだからいいかもしれないが、

四組には居るのだぞ？相性にもよるかもしれないが代表候補生には代表候補生を

ぶつける方が確実という事に気づいてもいいし……しかも専用機持ちなのだから

ほぼ自由に訓練できる筈なのだから、私の理屈は何一つとして間違っていないはずだ。

「織斑、お前には束から専用機が贈られる。理由はわかるな？もちろん他の男子にも

（面倒くさそうだったが）作成するとの事だ」

専用機の条件を満たしてしまった一夏……代表ともなれば戦闘経験

が多くなるから
ちょうどよさそうな気もするが……あ、千冬さんがこっちを見ている。
これは少々面倒な事になりそうだな。

「篠ノ之も持っているのだから」

「専用機（笑）のアレか？」

確かに私専用の機体である事には違いないのだが、あくまで変身した私に補助パーツを
纏わせただけだし、それも飛行機能とシールドを追加するだけのものだから妙な
期待をされても非常に困るしかないのだが……一夏が視線でアレか？と聞いてきたのでアレだ、と返しておいた……まあ、さっさと公衆の面前で
ＩＳとして披露しておけば、後々面倒も無いだろうから、最短でお披露目可能な
対抗戦出場のためになってもいいかもしれないが、それでも私自身には

非常に納得がいかない。
よし、ここはオルコットに任せよう……代表候補性として何か演説で人の心を掴んで
みせろ！と視線を送ってみるのだが、既に机を叩いて立ち上がっていた。

「納得がいきませんわ！！」

今朝までの落ち込み具合が嘘のようだな……が、何故だかわからないのだが、
非常に不愉快な予感がする……オルコットに対してではなく、別方向からの
不快感だ。

「百歩譲りまして、篠ノ之さんはいいとしまし「何故ＩＳの基礎を理解して
いないような男子を代表にしなければならないのですか！！」
……」

ものすごく否定できない、一夏を見ると「確かに何も知らないけど

さ……そんな

大声で言わなくてもいいだろ」と呟きながら伏せていた。

確かに、授業中にも何度も先生に質問をしていて山田先生や織斑先生以外に

鬱陶しいという視線を送られていたような気がする。

おまけに古い電話帳と間違えて（冊子の項数的に勘違いしそうだが）捨てるという、

勉学において取り組む姿勢が全くなっていないと公言しているような状況、

これだけで不適切と見られても仕方ないと言えば仕方がないのだがあんまりだろう。

「だいたい、コアの製造はまだしも全体的に日本人は他の国に

劣っているじゃないですか！！」

……確かに千冬さん以外に優秀なパイロットを排出した例はないし、機体の性能に

ついてもやはり日本以外の国の方が優秀な機体が多い……日本だと整備士は

まだしも機体の作成能力が一人を除いて大幅に遅れをとっている……ちなみに
姉さんはコアの製造がうまくいっていない……理由はまともな材料がほとんど
他の国で止められているからだ。
設計図を世界的に公開して自分への追求を最小限に抑えようとしていたのだが、
結果的にほかの国が自分の国で保有数を増やそうと躍起になるという事態を
生み出して、半端品しかできないという惨状になっているためである。
おとなしく姉さんに任せておけばコアの数は増えていたであろうに、と思う。
ところで、今話しているのはオルコットではなく、留学生の誰かだ。
オルコットはまた自分の発言を遮られたショックで机に伏せている……妙なトラウマを
植え付けてしまったようだ――イギリスに帰りたい、でもブルーティアーズの
テストが――――と小声で泣きながらつぶやいているのを聞いて気の毒になった……

最初の自己紹介の時に嫌そうな顔をしてすまなかった。

「だいたい、こんな島国の猿と一緒に勉学を行うのはいやだったんですよ！

ねえ！オルコット様！」

じゃあ、なんでお前は日本に来たんだ。

あと、この教室の八割以上は日本人だということに気がついていないのか？

完全に村八分状態になっているぞ。

「いえ、私は日本が楽しみだったのですけど――――」

「ほら！オルコット様もこういってらっしゃいますわ！！」

お前の耳はどうなってるんだ？オルコットが頭を抱えてるぞ。

まあ、そのおかげでオルコットへの態度は大分軟化しているのだがな。

そうそう、ようやく思い出した、確か今しゃべっている奴は代表候

補生予備の奴だ。
名前までは思い出したくもないがな……とここで一夏が立ち上がった。

「イギリスだって立派な島国じゃねぇか！学びに来たくなきゃ最初からここに
来なけりゃ良いだけの話じゃないか！そんなに嫌ならさっさと尻尾振って
自分が1番良いと思ってる国に帰りやがれ！」

「な！！ひどい暴言ではないですか！！！」

「先に暴言吐いたのこちらですわよ……」

若干オルコットが切れかけている。
というか、イギリスの価値を貶めていると気づいてもよさそうなものなのだが、
あれが代表候補生だったら目も当てられない。が、それでも一応は予備なのだから、
国を背負う可能性があるということを自覚しろ。

「先生！私、キャサリン・モーリスが立候補します！そして決闘を挑みますわ！」

「わかりやすいのは嫌いじゃない、お前みたいな奴には絶対に負けないからな！」

「……そうだな、クラス代表は強いものがいいから対戦方式で選抜するのも

悪くはないな」

どうやら、なし崩し的に四人の総当たり戦になりそうだった。

一応来週から行う予定ではあるみたいだが――――一夏は訓練不足だが大丈夫なのか？

やる気満々なのはいいが、気力だけで勝てるほど甘い世界ではないのだぞ？

結局、クラス代表選抜の対抗戦の為のスケジュールを組むとのことでお開きとなった。

「申し訳ありませんでしたわ」

「え？いや……頭を上げてくれよ！お前は悪くないんだしさ」

帰りのＨＲ終了後にオルコットが頭を下げに来た……モーリスとかいう生徒は

とっとと何処かに行ってしまったそうだ……かき回すだけかき回してやりたい放題か、

自分の所の代表候補生には謝らせておいて自分はさっさと訓練に向かうのか。

「いいえ、落ち込んでしまったとはいえ止めなかった私も同罪ですわ。

それに彼女のあの態度の悪さも私が原因の可能性が高いですもの」

「代表候補生の肩書きが関係ありそうだな？」

そういえば、あの生徒はオルコットに敬意を抱いてはなかった気がする。

……もしかしたら接戦のところで劣ったことによるコンプレックスで、自分より

劣るものに対して優位に見せることで自尊心を保とうとしていたのかもしれないな。

「……本来なら、実力から言えば彼女が適任だったのですが、その……

他の国に対する偏見とテスト機体であるブルーティアーズの適正によって

私が代表候補生となったことで怒りを買われたようで……」

「あの態度はもともとだったのか……」

他国を侮蔑するのは内心だけにとどめるならまだしもほぼアウェーなこの場所で

堂々と暴露するような態度……確かに代表になる場合にはあの態度のままだと

確実に“姉さん”が何かしらやらかしてもおかしくはない。

日本に住む人間はまだしも日本を馬鹿にされれば不愉快になってなんらかの

報復手段にでるに違いないからだ……まあ、千冬さんがそれなりに母国を気に

入っているというのが理由の一つなんだがな。

「ホントだよねー、そこの金髪も同じようなこと言ってたらイギリス保有のコアを

全部自爆させなきゃいけなかったもん」

「……へ？」

唐突に現れて唐突に物騒なことを宣言する姉さん……いつの間に湧

いて出てきたのだ。

少々驚いてしまったじゃないか……それと、オルコット、よかったな。

お前の態度のおかげでイギリスのコアが守られたみたいだぞ、顔を青くして力なく

笑っていてそれどころじゃないだろうけどな。

「そうだ、いっくん。専用機三機作ったから、男子を連れてアリーナに来てねー」

そう言って姉さんはさっさと教室を後にした……アリーナに向かったのだろうな。

というか、もう既に機体を完成させていたのか……前々から作り始めてたのだろうな、

でなければいくらなんでも早すぎる。

「……今朝作り始めるとか言ってたはずなんだがな」

千冬さんの声なんて今は聞こえない……早すぎるってレベルではないぞ。

大企業ですら、一週間近く調整して作るのがやっとなのに個人で半日なんて
ありえないことを行われてたまるものか……それも三機！！
教室に残ってた他の生徒がポカーンとしてるのも気のせいに違いない。

「というわけだ、織斑。真鯛と……もう一人の男子を連れてアリーナに
向かうといい、ついでに数少ない同じ境遇の男子としての親交も深めてこい」

まだ見ぬ三人目に話しかける機会を得たのはいいのだが、釈然としない姉の異常な
機体作成能力に誰かツッコミを入れてくれ。
あきらめに似たため息をつきつつ、少しでも訓練になれば、という事で教授を
かってでることにしたオルコットを引き連れて、まずは真鯛に会うために隣の
クラスへと足を運んだのであった……もう一人の男子はどんな奴なのだろうな。

第三話（後書き）

束さんが化け物状態。

多分、科学力では世界一で誰も敵わない状態！

ちなみに三機ともクセはあるもののほぼ同格に作ったようです。

第四話（前書き）

明けてからかなり経ってますがおめでとうございます。

ようやくの投稿になります上に、まだまだ変身シーンがありませんが

よろしくお願いします。

第四話

「女子に囲まれてウハウハだと思った過去の自分を殺したい」

「……あー」

真鯛は女子にトラウマができてしまったようだった。

善意１００％（好奇心とも言うが）の質問攻めに軽く恐怖を覚えてしまったようだ。

……その為、たった半日でトラウマとなり私とも目を合わせない状態なのだが、

事情が事情なだけにそこを矯正するのはゆっくりとやった方がよさそうだ。

オルコットも訝しげに思っていたが、逆に男子の中に顔見知りがいない状態で

一人放り出されるとどうなる？と説明したら納得したらしく、何も言わないで

おく事にしたようだ……というか考えてみたら男子の群れの中に女子の方は

貞操的な意味で危険な気がするな、特にこの学園に通っている女子生徒は全員、
確実に男子の琴線に触れる可能性が非常に高い……まあ、私だったら全員叩き
伏せるだろうが。

「三組の男子とは顔を合わせたのか？」

「全然……というか精神が削られて教室から出る気力が無くなった」

……哀れすぎる、というかご愁傷さまだな。

一夏も若干私の背中に隠れているのは同様の理由なのだろう、多分。
幼馴染である分、抵抗が非常に少ないのだろうな。
というか勇気を振り絞って教室から脱出したほうが精神損害が少なかったのでは
なかろうか。

「話の中断の仕方がわからないし……断ろうとすると泣きそうになるのに

どうしろと」

「……いや、うん……わからん」

流石にそういう状況は実際に受けてみないと理解しがたい。

一夏は同性なだけあって理解できているようなのでうなづいていたが。

私とオルコットは真鯛とは異性であるので理解が追いつかず、顔を見合わせて

首をかしげることしかできなかった。

とはいえ、用向きがあるのは真鯛だけではなく、隣のクラスにもあるので

さっさと移動してもらえるとありがたい。

もしかしたら三組男子も同じような状況下にあって半死人状態に陥っている

可能性はゼロではないのだ。

もしかしたら救助が必要かもしれないので病み上がり状態で悪いが早めに

移動させてもらおう。

「専用機が完成したそうだからアリーナ集合だ」

「早くないか？男子が見つかってからそんなに経ってな――」

「本日作成開始して三機作ったそうだ」

「仕事早いってレベルじゃねーぞ！！？」

やはり驚くに決まってるよな。

驚くなというのが無理な注文なのだから反応的には間違いではない。

というか抜け駆けずるいという視線が集中しているが、残念だったな。

「では、隣のクラスに向かうとしよう」

「どんなヤツなんだろうな」

「……保健室に行った？」

「えぇ、なんだか気分が悪くなったらしくて……」

ものすごく精神面が豆腐だったんだな。

真鯛の方が精神面が強かっただけなのだろう……というか、気分が悪くなる

ぐらいなら隣のクラスの男子である真鯛に会いに来ればよかったものだが。

「ちょっと、積極的に話しかけすぎたかしら」

「周囲を囲い込んだのがいけなかったのかしらね」

「原因が分かった、お前ら鬼か」

異性が集中包囲している中に男子が一人だけポツンいる状況を思い浮かべる。

悪意の有無関係なく地獄だ……一夏も真鯛もこころなしか震えているし。

「珍しいのはわかるが、自分がそうなった場合を考えろ」

「百歩譲っても学園側のミスだろこれ」

どうやら思惑として、それぞれほぼ均等に接する機会を設けるためにわざと男子を分散したとしか思えないのだが、普通は一箇所で纏めておくべきだろう。

精神衛生面でも目に見える範囲に味方がいるのといないのとでは大違いの筈だ。

日本だけで研究費などをまかなうのが限界だったらしく、寄付の代償が均等に

機会を設けるために分散しろという無茶苦茶な要求だったそうだ。

ＩＳ学園は日本だけで資金を出していたから金銭面に飛びついたのだろうな。

結局独立したある種の中立国家みたいなものとはいえ、在籍しているのは各国の

研究者などがほとんどだから考えなしに分散に賛同したのだろう。

「一応、保健室に向かおうか」

「保健室の外で待ってるから一夏と真鯛で行くといい」

女子恐怖症になっている可能性が非常に高いだろうからな。

そのまま私を先頭にしたまま保健室へと向かうこととなった。

「泣いておりますわね」

「嬉し泣きだろうな、おそらく」

一夏と真鯛が保健室の中に入っている間私とオルコットは外で大人しく

待機していた……しばらく会話があったようだが、相手の男子生徒が途中で

泣き出したのである……悲痛なものではなかったようなので私は入るような

無粋なマネはしなかった……途中で保健室の先生が気まずそうに出ていたし、

選択としては間違っていないはずである。

結局女三人で大人しく立ったまま待機していた。

「青春ねー。若いって素晴らしいわー」

「女子校に男子が三人だけという異常な環境で青春も何も無い気がするのですけど……」

オルコットの言うことも最もではあるが、今はその言葉そのものが無粋だ。

幸い小声だからなかには聞こえてはいないようだが。

「だが、ひとりよりかはマシだろう……半ば吊り橋効果だが、男子同士の友情というものはこういう環境では貴重だろう？」

「でも怖いのはそれ以上に発展することよね」

いくらなんでもないと思うが、女性恐怖症に陥ったらそうなる可能性がゼロではないのだ……多分一夏と真鯛は大丈夫だろうが、もう一

人の男子に
限っては見極めてすらいないのでひどく恐ろしい。
そういう関係になるのは、まあ人それぞれだから構わないが、この学園で
なってしまうと、余計に女性恐怖症のもとになりかねない……主に噂で。
と、室内で動く気配を感じた……出てくる頃合なのだろう。
「もう大丈夫なようだな……隠れるのはよしとしたほうがいいのか？」
「そうしておいてくれ」
まあ、いいだろう……いきなりトラウマが解消されて女子に慣れるというのも
変な話であるわけだし、ただ予想外にも男の顔に吹きかけたのには勘弁してくれ。
どこの極道なんだと言いたいぐらいに凶悪な面構えだぞ……その人間の目元が
潤んでいてうつむきがちだと微妙なギャップのせいで微妙な気分に

なってしまう、

当然だが、見かけで判断してはいけないのだろうけども、これは無理だ。

さっさと訓練場に移動して受け取って部屋に戻ろう。

「――――移動しましょうか」

ちょっと呆気に取られていたオルコットに対して、心境だけは共感できる。

第四話（後書き）

ちなみに、転生者の男は真鯛だけであり、三組男子は一般人です。

簡単にいえば蝶の影響

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8338y/

一夏が主人公？いいえ、ヒロインです

2012年1月6日12時45分発行